

こころころの森の地域連携事業の 現状と課題

こころころの森

大塚 明美

―地域を知ることからスタート―

「こころころの森」は、たくさん親子が利用します。しかし、同じ市内でもこころころの森の利用が少ない地域があります。平成21年度の上半期までの利用者データから、利用者の少ない地域は、13町のうち、萩山・秋津・青葉・恩多・富士見・多摩湖・諏訪の7町でした。その中で青葉は、地域の保育園が老人施設や地域の自治会館などを利用したひろばを開設しており、利用者も定着している地域でした。萩山は、すでに地域で「親子のひろば」を開催はじめていまし

た。そこで残りの5か所で出張ひろば「こころころのおもちゃ箱」のぶれ開催をしました。実際に開催してみると、恩多は青葉が近いことから青葉の施設等を利用していることが分かりました。諏訪は近くの野口町のひろばを利用しており、また「こころころの森」を徒歩で利用できる地域ということがわかりました。逆に富士見は、公共の施設や公園はあっても0～1歳の子ども連れには利用しにくい施設が多いことがわかりました。そこで平成22年度は、秋津・富士見・多摩湖の3町で「こころころおもちゃ箱」を毎月1回ずつ実施することになりました。



開催の目的は、「ころころの森」を利用されづらい地域に出向いて行つて、地域から孤立しがちな親子をなくすことに少しでも貢献すること。また、地域の親子が集い、子育ての情報交換や悩みなどを共有し、虐待等の予防の役割を担いたい。子育て中の親子が地域の人とつながり、地域の誰もが暮らしやすい街になっていくことを大事にしていきたいです。

平成22年度は、まず地域の親子に「ころころおもちゃ箱」を認知してもらうことに重点をおきました。

ここでその実践として、特に「ころころの森」を利用

したことがない親子が多く訪れる、秋津を取り上げてみたいと思います。秋津の親子が「ころころの森」を利用しない理由は、「遠い」・「交通の便が悪い」が最も大きな理由でした。「せっかかく行っただけど混んでいたから」という声もあ

りました。意を決して出かけてきた親子にとつては、もっともな声だと思えます。理由はこのようなマイナスイメージだけではなく、中心部から離れたこの地域には、活発に活動しているサークルがいくつもあります。仲良しのお友達だけで形成されているサークルが多くなっている中、年齢も様々で新しいメンバーを快く受入れ、代替えがあっても長く継続をしている、そんなサークルが多く活動をしているのです。

「双子の会」のメンバーも多くがこの地域の親子です。「ころころの森」が実施している「サークル支援事業」は、サークル活動の存続の一端を担っており、今後もより充実をはかっていかなければならないと思っています。

サークル活動の大きな悩みの一つに、活動の場所があります。「ころころの森」にはサークル活動室がありますが、秋津のサークルには利用しづらく、実際の活用は少ないのです。では、地域のどんな場所が活動場所となっているのでしょうか。季節の良い時期は、公園を利用していても多くあります。しかし、0歳の子どもを持つ親にとつては、戸外は過ごしにくい場所でもあります。特に年に数回しか整備がされない公園は、時には子どもの姿が隠れてしまうほど、多くの草に覆われていることも少なくありません。また夏や冬も戸外は過ごしづらい季節です。ところが、一番

使いやすい地域の「おひさまひろば」（学童保育が学童のいない時間帯を地域の親子に週に2日開放、またサークルへの場所を貸している取り組み）は、この時期は学校が休みで学童保育があり、地域の親子は利用ができません。各地域にはふれあいセンターもありますが、高齢者向けに作られたこの施設は、親子連れには少々利用しづらい施設という声が聞かれます。それは施設の構造的なことではなく、地域の高齢者と地域の子育て親子が交流する機会がないことが大きな要因となっているのではないのでしょうか。そこで大きな役割を果たしているのが、「ころころおもちゃ箱」です。平成22年度は、先にも述べた通り、地域の親子に周知してもらうことに重点を置いたことで、親子の居場所としては認知されてきました。引越してきたばかりの親子が「ころころおもちゃ箱」を訪れてくることが多くあります。友達を作る場となったり、スタッフがサークルを紹介し、サークルに入った親子もいます。地域の情報を提供することで、親子の生活範囲が広がることもたくさんあります。しかし、地域の多世代の方とのふれあいは決して多くはありません。

——ころころの森としての連携のあり方——

そんな多世代との交流を考え「ころころの森」で

は、平成20年度のオープン間もなくから、ボランティアアセンターと連携して「昔遊び・遊び大好き」の取り組みを毎年実施しています。この取り組みは、地域の多世代の方が「ころころの森」で、遊びを通して親子と触れ合う機会としています。毎回、多くの親子が参加しとても喜ばれています。また地域の多世代の方も楽しく参加してくれています。

この企画の出会いから、「ころころの森」が協力・連携している「銭湯で遊ぼう」にも、多くの地域の多世代の方が協力・参加しています。多世代の中には、白梅学園の学生も参加しています。当初6名ほどだった学生も現在では20名ほどが参加しています。銭湯の近隣のお豆腐屋さん、市内の企業もこの取り組みに賛同し参加しています。この企画を「ころころの森」に持ち込んだNPOの代表は、「子育て支援の専門家である白梅学園が運営していること。学生にも参加してもらいたいと考えていたから。」と、その理由を話していました。

また、「ころころの森」では、白梅学園の草野篤子先生、金田利子先生のお力で、平成21年度には5回連続講座、平成22年度には3回連続講座として「世代間交流コーディネート養成講座」を開催しました。平成21年度の参加者48名、平成22年度の参加者51名、8回の講座にのべ278名の参加がありました。すでに

地域で活動している青葉・萩山のひろば担当者もこの講座に多く参加してくれました。ここで学んだことが、それぞれの地域で大きな役割を果たしていくことで、より地域の多くの世代間の距離が近くなり、良い関わりも生まれ育つてきています。

—今後の課題—

「ころころおもちゃ箱」でも、利用する親子が地域の多世代の人たちと関わりを持つきっかけを作っていないかなければなりません。白梅学園の専門家が「ころころおもちゃ箱」で、乳幼児や高齢者の食に関する講座や、乳幼児や高齢者の健康に関する講座、ものづくりのワークショップなどを開催することなどで、大きなきっかけ作りになると思います。「ころころの森」を学校法人白梅学園が運営委託されているからこそ、専門性を生かして、地域の多世代の人たちに提供できるのだと考えます。平成21年度に青葉で、地域の開催しているひろば・おひさまひろばと連携して、白梅学園の林薫先生が親子向けの食育の講座を開催しましたが、大変好評でした。この様な講座やワークショップを親子だけでなく、地域の高齢者にも参加できる企画として実施していくことは、地域から孤立する親子を少なくするだけでなく、地域から孤立する高齢者も少

なくしていくことの一端を担っていくことになると思います。

また、地域の人材発掘も大切なことです。「ころころの森」には、ハーモニカを吹いてくれる方、二胡の演奏をする方、折り紙を教えてくれる方、親子とふれあってくれる方など、たくさんの方の地域の人に支えられています。そんな地域の人たちが、「ころころおもちゃ箱」でも楽しい一時を過ごしてくれたらと思います。そして、お互いが互いを知り、いたわり合える、元気になれる。理想かもしれませんが、そんな地域づくりのために一端を担っていければよいと思います。論じるのは簡単ですが、実行し継続することは大変なことかもしれません。しかし、それをコーディネートしていく人材は育ちつつあります。その人たちが「ころころの森」だけでなく、地域で活



動していく機会をつくるのが重要です。中心部にある

「ころころの森」は、市内全域の支援施設であり、地域連携の核になる施設です。よく汐見センター長(学長)が話すように「ころころの森」に来るのを待っているだけではなく、こちらから地域に向向いていかなければ本当の地域連携はできません。そのためには、それぞれの地域性をしっかりと把握する必要があります。東村山市と一口にいても、地域によってその環境や住む世代の分布など、本当に様々な特徴があります。例えば、市内で一番高齢化が進んでいると言われている萩山地域にも、たくさんの方々が居場所を求めているのです。そこで高齢者の方々が「何か出来ることがあるのなら」と「親子のひろば」を開催しました。開催に当たって「ころころの森」を見学したり、手作りおもちゃを参考にして作ったりしました。また今年度は、「親子のひろば」に「ころころの森」のスタッフが向いて手遊びや絵本の読み聞かせをしました。ひろば同士が情報交換もできました。手探りで一生懸命実施している萩山「親子のひろば」は、暖かくて丁寧な心が伝わってきます。「ころころの森」との交流・連携が、さらに発展に結がっていく役に立てることができれば嬉しいことです。

専門家が多くの白梅学園が運営していることが、地域支援・連携に大きな役割を果たし、必要とされ期

待されているのです。